

# 三水会会報

北里大学海洋生命科学部  
同窓会会報 第 75 号

平成30年3月発行

編集者 内藤 文隆

発行 三水会(北里大学  
海洋生命科学部同窓会)

事務局 〒246-0031 神奈川県  
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル  
0120-873-135

目次／走馬灯 (加戸隆介)	P.1	研究室紹介	P.5
〃	P.2	お祝い会	P.6
〃	P.3	関西地区親睦会／北里祭報告	P.7
鹿児島県支部設立	P.4	お知らせ	P.8

<http://kitasato-sansuikai.jp/> E-mail [information@kitasato-sansuikai.jp](mailto:information@kitasato-sansuikai.jp)

## 走馬灯

北里大学名誉教授  
加戸 隆介



はじめに  
昨年3月末を  
もって33年間御  
世話になった北  
里大学海洋生命  
科学部を定年退  
職いたしました。  
水産学部時代や  
海洋生命科学部で丁度人生の半分を  
過ごしたことになります。私の拙い  
思い出を振り返り、卒業生や在学生  
に当時から振り返っていただく機会にな  
れば幸いです。

### 赴任当時の三陸

私は1983年4月に岩手県大船  
渡市三陸町(当時は気仙郡三陸町)  
にある北里大学海洋生命科学部(当  
時は水産学部)に赴任しました。研  
究室は故橋高二郎先生が教授を務め  
られていた水産増殖学研究室でした。  
これに先立つ4年ほど前、在籍し  
ていた東京の大学院博士課程での研  
究の一部として東北海域のフジツボ  
類の付着時期を明らかにするため、  
私は月一度の頻度で青森県の浅虫に  
あった東北大学浅虫臨海実験所と岩  
手県の大槌にあった東京大学大槌臨  
海研究センター(現在の東京大学大  
気海洋研究所国際沿岸海洋研究セン  
ター)を訪れていました。当時はまだ  
東北新幹線がなかった時代なので、  
経費節約のために上野駅からの夜行  
列車を利用してました。下車駅は  
浅虫駅と(花巻駅経由で)大槌駅で  
す。まさに「石川さゆりの「津軽海  
峡冬景色」がヒットして、その歌詞  
を実体験した時代でした。この時、一  
度、冬の大槌での調査後に、三陸町  
にあった北里大学水産学部の水産増  
殖学研究室に助手として勤務されて

いた福代康夫博士をお尋ねしたことが  
ありました。福代先生はご自身の車  
で送迎して下さったのですが、大学  
近くはご存じのように細い曲がりく  
ねた林道です。この見通しの悪い林  
道を結構なスピードで運転されていた  
ので、私は冷や汗をかきながら助  
手席に座っていたのを今でも覚えてい  
ます。その林道をまさか数年後に同  
じような速度で、私自身が往き来す  
ことになるうとはその時夢にも思  
いませんでした。

三陸キャンパスに赴任した年には、  
東北新幹線が盛岡まで開通した  
ものの、仙台以北の停車駅は、古川、  
一関、北上の3駅しかないという状  
態がしばらく続きました。そのため、  
東京等に出張する際は、私達教  
員は列車の本数の限られる大船渡線  
(一関駅から盛岡までのJR区間)  
を利用するより、新幹線で最寄り駅  
となる一関駅まで車で行き、そこに  
車を駐車しておくという手段をとっ  
ていました。その後しばらくして、  
仙台―盛岡間に「くりこま高原駅」、  
「水沢江刺駅」、「新花巻駅」などが  
建設されたために、東北新幹線への  
最寄り駅は水沢江刺駅に代わりまし  
た。何れの駅も未だに田んぼの中に  
佇む駅といった状況です。東京から  
の帰途、夜遅くに水沢江刺駅に着く  
と、田んぼの蛙達がグエツ、グエツ  
という大合唱で迎えてくれ、「ああ、  
帰ってきた」とホットしたのが愛お  
しく懐かしく思い出されます。カエ  
ルといえば、初春の頃、雨が降ると  
道路に何百何千ものカエルが這い出  
てきます。車を運転していたとて  
も躲せないほどの多さでした。仕方  
なく轆いて通過せざるを得ないのが  
仕方ないとは言えいつも可愛そうで  
した。きっと同じ気持ち味わった卒  
業生もおられるでしょう。

サファリパーク三陸

三陸キャンパスは野生動物を沢山見かけることも特徴でした。赴任当時はしばしば国の天然記念物であるニホンカモシカが校内にも出現しました。図書館1階の大会議室で会議を行っていると、窓の向こうにカモシカがよく見物に現れたの思い出します。その後年々鹿が増えたために、残念ながらカモシカはほとんど見られなくなりました。その他には、タヌキ、キツネ、アライグマ、ドバト、キジ、エブリス、フクロウ、シマヘビ、アオダイショウ、など私が見た動物だけでもこれくらい登場しました。ツキノワグマとも27年間の三陸生活の中で3度遭遇しました。このうち一度の出会いには、痛いほど衝撃的でした。なぜかというのと、運転していたホンダの「ライフ」の右ドアを大きく凹ませてくれたからです。修理に5万円を費やしました。当て逃げたそのクマは道路を横断して逃げていきましたので、熊の胆でもとって修理費を補填する日論みも叶いませんでした。

研究室のこと

私は、ロブスターやイセエビ類の研究されていた故橋高二郎先生の研究室に赴任後数年間所属していました。先生は海外の大型エビ類にも関心を持っておられ、先生が企画された数度の海外調査のうち、オーストラリア・ニューギランドに生息するミニマイセエビ類調査に無脊椎動物担当として私も随行しました。私にとっては初めての南半球の旅で、日本ではみられない不思議な形の海藻などを見て、北半球の生物相との違いを目の当たりにしたのがとても新鮮でした。タスマニア島では、フジツボ類とカメノテ類の中間的形態をもつ *Catomerus polymerus* というとても美しいフジツボに出会

うことができたのも大きな収穫でした。

赴任後4年目に、水産学部で新しい研究室として「基礎生産学研究室」が開設され、東京大学農学部を退職された故平野禮次郎先生が初代教授として就任されました。先生は私の大学院時代の恩師にあたります。先生の着任一年後に私は水産増殖学研究室からこの基礎生産学研究室に異動になりました。基礎生産学研究室の助教には東北大学から小河久朗先生（それまで、毎年、北里大学水産学部で水産植物学の非常勤講師を担当され、学生実験でも海藻類の実習を担当されてきていました）が着任されました。こうした教員の専門分野から基礎生産学研究室では水産植物、無脊椎動物、動物プランクトンなどの生態解明や有効利用を中心に研究が展開されてきています。

フジツボ達との付き合い

最初の対象種は三陸沿岸の潮間帯に群れをなして付着していた中型のチシマフジツボでした。なぜこのフジツボが潮間帯の優占種であり続けられるのか、なぜ春先にだけ付着時期が限られるのか、が最初の研究テーマとなりました。これらの疑問

を解くために、毎日最寄りの崎浜港の岸壁に出かけ、①岸壁からこのフジツボを十数個体剥離して抱卵率を追跡、②表層海水を採水してクロロフィルa濃度の分析、③同場所で行った定量採集は、毎回5リットルの布バケツを使って総量1トンの海水をプランクトンネットで濾過するという作業でした。これが結構きつい作業だったので、後に腰痛に悩まされることになりました。しかし、この作業を数年間続けた結果、チシマフジツボは海中のクロロフィルa濃度がある値を越えると、抱卵した親フジツボが幼生を孵化させることが分かりました。クロロフィルaの増加は春の珪藻が大増殖することを意味します。この珪藻は親の餌にもなることから、この時期に幼生を孵化させることが生き残りにとって有利であったと解釈されました。

1993年に「dancyu」という食べ歩き系の食雑誌にミネフジツボが水産物として紹介されたのを機に、ミネフジツボの養殖に向けた基礎研究を青森県水産試験場と共同で始めることになったからです（図1）。これが契機となり、ミネフジツボに関わる研究は越喜来湾や大船渡湾に場所を変えて震災の年まで断続的に続きました。また、2000年には、日本では初めてとなる北からの外来フジツボ（和名をキタアメリカフジツボと命名。原産地が北米の太平洋岸であること由来）を大船渡湾で学生達と発見することになりました。このフジツボの生息、移入起源についての研究が新たなテーマとして加わりました。分布北限を調べに、一人車で紋別まで行った調査では、ご退職後に当時根室市の水産研究所でトラバガニの研究をされておられた故橋高先生や高校教師をしていた卒業生にお世話になりました。さらに、震災後の2012年には北東北でまた新たな外来フジツボ（和名をナンオ

東 奥 日 報

93.3.21

県水産増殖センター

# フジツボ養殖へ基礎調査を開始

## 北里大と共同研究

陸奥湾に広く生息するフジツボ。市場価格が高騰する中、高価なが能力が未知なミネフジツボ。同センター魚類部は、このフジツボがホタテやホヤと異なる有力品種になる可能性をもち、基礎的調査を行っている。北里大水産学部（宮手町）も生息地の調査の一環として今年から共同研究を行うことになり、共同で研究する。調査の対象となるのは、ミネフジツボといわれるフジツボ。陸奥湾の水深10メートルから20メートルの間に生息。殻は最大4センチ。フジツボがどのよう

な所を好むのか、生息する水深などの種別や現在の生息状況を調査した。現在、加戸隆介講師と二人の研究員、四年生がセンターで生体調査分析や生息地調査を行っている。

「市場価格がキロ二千三百円と高騰している。ミネフジツボは、ホタテやホヤと異なる有力品種になる可能性をもち、基礎的調査を行っている。北里大水産学部（宮手町）も生息地の調査の一環として今年から共同研究を行うことになり、共同で研究する。調査の対象となるのは、ミネフジツボといわれるフジツボ。陸奥湾の水深10メートルから20メートルの間に生息。殻は最大4センチ。フジツボがどのよう

図1：ミネフジツボの養殖に向けた青森県水産増殖センターとの共同研究開始の記事（東奥日報1993年3月21日版）

ウフジツボと命名。原産地が南欧であること(由来)を発見したことにより、この種の移入や分布拡大理由、生態などがあらたな研究テーマとなりました。調査に出かけた秋田では県の水産振興センターに勤務していた卒業生が協力してくれました。このように、次々と現れるフジツボ達が私の研究に対するモチベーションを支え続けてくれたとともに、それを一緒に解明してくれた院生、卒論生、卒業生の存在が、ここまですべてこられたと思っております。

### 講義・実習

「実際の生物を使った講義や実習」が三陸での特色だったといえるでしょう。たとえば、解剖実習では、とれたてのホタテガイを使うことができたので、心耳と心室(1心室2心耳でしたね)が収縮するのを皆で観察できました。無脊椎動物学では、屋外水槽(赴任後数年間は現在のマリンホールの前の広場が全て水槽でした)で飼育されていたアメリカンロブスターの脱皮殻を剥製にし、講義で回覧して脚の数や節の数、触角腺の位置などを見てもらい

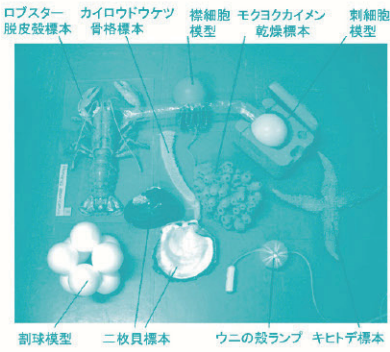


図2: 無脊椎動物学の講義中に回覧した模型や標本の一部

ました。少なくとも現在の4年次生までは私の無脊椎動物学の講義でこのロブスターの標本を見たはずですが(図2・左端の標本がそれ)。あれは三陸キャンパス産の25年以上のレアものというわけです。標本は学部に残してききましたので、今後も使いつけてくれると嬉しいですね。また、近くの小川に学生達とプラナリアを取りに行き、扁形動物の講義時に生きた状態で回覧したこともありました。

ところで、講義は今でこそパワーポイントを使ってスクリーンに絵や写真を映すスタイルが主流となりましたが、当時は板書による講義が普通でした。私が担当した無脊椎動物学では体の形態や構造を理解することがとりわけ重要です。そのため、以前は黒板に頻りに図を描きました。「外胚葉は白、内胚葉は赤、中胚葉は黄だよ」と前置きして、3色のチョークを使い分けて描いたのですが、当時の学生からは黒板の図を写すのに必死だったと聞かされています。

### 未曾有の出来事

学部全体に及んだ最大の出来事はなんとと言っても2011年3月11日の東日本大震災でしょう。この震災の2日前に卒業式を終えていたことで、三陸キャンパスに全学生がいなかったのは幸いでした。しかし、1名の女子学生が津波で帰らぬ人となりました。彼女のご遺体は7年経つた今も見つかっていません。ご冥福をお祈りするとともに、いつの日かご遺体が見つかることを祈らずにはいられません。

あの日、私は会議のために相模原キャンパスに来ていました。病院の食堂で遅い昼食をとっていたときあの震災に遭いました。相模原でも結構な揺れだったので思わずテーブルの下に身を隠しました。東京出

張時には震災に遭いたくないと常々思っていましたので、あつ遂にその時がきたのかとこれから予想される混乱が頭をよぎりました。しかし、まさか震源地が三陸であったとは、この時には思いも寄りませんでした。相模原でのその後6日間は今ではまるで夢の中の出来事だったかのように臆気です。余りにも慌ただしかったためでしょう。

3月18日に三陸に戻って見た津波の被害は、テレビの画面で見たものとはまるで規模が違いました。現地に立つと360度全てが瓦礫に覆われていました。その惨状は実際に見た者で無いと理解できないでしょう。この地震と大津波により、学部はキャンパスを相模原へと移転することを余儀なくされたのはご存じの通りです。その後の熊本地震や各地の水害により、三陸地域への注目度が薄れた感がありますが、まだ仮設住宅で暮らさざるを得ない方々の存在や、嵩上げ工事がようやく終わっただけの所も存在しています。復興はまだ道半ばで、完全復興までにはまだ先が長いことをみなさんに知っておいて欲しいと思います。

### 新天地での再生

震災直後の5月から相模原での講義が開始されました。教養校舎横にあった元食堂のクレセントを改造した建物が仮設研究室となりました。壁のない生活。を14ヶ月間学生とともに送りました。授業は集中講義形式で実施され、1講義1日4時限を週に一度、これを3週間続けるというハードなものでした。しかし、学生も教員も共にこの困難を乗り越えていこうとする気持ちで一体感を共有できた期間だったと思います。学部では三陸の水産業の復興の一助になるようにと「北里大学海洋生命

科学部学術的復興支援プログラム」を立ち上げ、津波で影響を受けた海や生物の影響や回復状況を明らかにする活動を続けてきました。私も震災後はほぼ毎月三陸に調査に出かける日々が続き、気がついたらあつという間に6年間が過ぎたというのが正直なところでした。毎日海を見ながら登下校した生活から、月に一度しか海を見ることのできない生活に変わり、そんなスポット的な観察から海の環境や生物の真の変化を把握することの難しさと不確かさを実感した年月でした。学部のキャンパス移転によって学生気質も環境の違いに応じて変わることになったのは当然のことかも知れませんが、それによって私達教員も対応していくことが都市型大学教員の使命になったことを知らされたのもまたこの6年間でした。

### 終わりに

昨年の6月に郷里の三重県に居を移し、退職後9ヶ月が早くも過ぎようとしています。一番の大きな環境変化は学生達との関わりが無くなったことです。今にして思えば、教えることを通して、私自身も学生達から色々教えられるかもしれました。改めて一緒にの時を過ごした皆さんに感謝したいと思います。

現在、月に一度東京に出張する機会がありますが、年明け早々に、卒業生3名が東京の勤務先に訪ねてきてくれました。恩師の故平野禮次郎先生がそうであったように、色々な分野で活躍する卒業生をみるのは心強いものだ、わたしもその立場になつて強く感じた次第です。

最後に、みなさんのそれぞれの分野でのご活躍を三重の伊賀の地から祈っております。(に)んじゃ。お後がよろしいようで。

## 北里大学同窓会 鹿児島県支部を設立して

水産増殖学科19期 加藤 紳

どちらかといえば回遊型の半生だったと思う。

埼玉→岩手→石川→ニュージーランド→オーストラリア→高知→鹿児島。私の居住地の足跡だ。幼少期の遊び場はもっぱら荒川の河川敷周辺だが、三陸で海の魅力にとりつかれてからは、一貫して海辺の仕事と生活を選んできた。

暮らす場所や仕事は自分で選択できるものだが、土地で出会う人は運にゆだねることになる。しかしどれだけの距離を回遊し、どこへ行くことも同種間であれば同じ群れを形成することは難しくないだろう。さしずめそれは私にとって、本学部卒業生という共通遺伝子だ。

鹿児島への移住は縁をたよったわけではなく、30歳にして恋い焦がれるようになったタツノオトシゴの養殖事業を営む目的だった。移住後間もなく恩師井田齊先生の退職記念パーティーが上野で開催され、先生が鹿児島ならばと、10回生の中村義幸先輩を紹介してくださった。

先輩も北海道出身ながらのインター移住者ということで、方言での苦労話などを交えながら鹿児島の魅力語りつつ「また鹿児島で一杯やろう」とおっしゃったが、いかにも多忙そうな方だったので社交辞令程度に解釈した。ところが鹿児島に戻り

名刺を整理していた矢先に電話があり、早速県内の同窓生を集めて私の歓迎会をしてくれた。これこそ暖流黒潮かと錯覚させられた温かさを実感したあの日のことを忘れることはないだろう。

いつしか私は鹿児島の三水会の事務役となっており、先輩を手伝い九州地区の三水会同窓会も開催した。酔っ払ってトイレに二人並び、覚えたての薩摩方言で「よか晩ですな」と言うと、「いつか鹿児島で全学の同窓会もつくろうや」と微笑んだ。常に飲むペースも将来展望も追いつけずに先輩を見上げていた私は「面白そうですね」と合わせる程度に返事をした。

鹿児島での生活にも慣れ、暖流を漂う感覚が当たり前になりつつあったが、先輩の訃報は極寒の海に突き落とされるような出来事だった。急激な温度変化に心の活性は低下し、同窓会の活動も減っていった。

それから二年ほど経ち、偶然葉学部の卒業生にお会いした。子供が通う幼稚園の保護者も獣医学部の卒業生だったことを知った。在学していた時代も異なり、お互い相模原の校舎にもわずか1年しかいなかったのに「北里」というキーワード



というキーワード

だけでなく不思議と会話が盛り上がる。鹿児島での初めての会合の心地よさが蘇る気がした。かつて自分が受け入れられた環境をただ過去のものにしてはいけないとも感じた。50周年を通過した同窓会本部もさらなる発展を目指しており、鹿児島県支部設立をライフワークの一環に加えてみたいと思うようになった。

意志が芽生えたと同窓生はどこまでも心強い。3回生の長谷川一敏先輩の後押しで同窓会本部も熱心に支援してくださった。県内でも三水会だけでなく、すべての学部の同窓生にご尽力いただいた。設立承認に漕ぎつけること以上にその過程に喜びを得ることができた。平成29年11月に鹿児島県支部設立総会を開催したが、本会の様子は全学の大学だより84号で報告するので割愛させていた

たく。正直なところ事務作業は面倒くさいが、支部運営は性に合っているのかも知れない。学生時代にサボってばかりいた時間を還元していると思えば気楽だ。大変だろうと気遣われるが、その点は心配無用で、鹿児島同窓生には同窓会維持のために内側へエネルギーを発散するよりも、北里生として胸をはって生活してもらうことで、大学の発展にも寄与し、日常の活力へと昇華していくものと願いたい。実は鹿児島での本学認知度は低いのが現状でいくぶん肩身が狭い。

本来、回遊型の人生であれば郷土埼玉へ戻るのがセオリーだろうが、私

はどうかわからない。入学時の大学案内に記述されていた「落ちこぼれは優等生」といったようなくだりが頭に浮かぶ。母川回帰性をもつ鮭も、時に帰る川を間違えるらしい。しかしこれが生息域を拡大させ多様性を構築していくとあった。私のような人間にも可能性があることを許容し、大きな励みになるメッセージだ。

世の中の組織が多様化し、縮小化するものも多い中、毎年新会員を増やし続ける同窓会は興味深い組織だと感じる。本学の1回生はまだまだお元氣な方が多く、しばしこの状況は継続するだろう。三陸知らずの若い同窓生と打ち解けたり、学部の垣根を取り払って仲間を迎えることのできる空間をつくっていきたい。これだけ楽しめれば、自分の人生は死滅回遊でもかまわないと思う(笑)。アイガトサゲモシタ。



前列右から3人目 加藤支部長

## 水族生理学(旧魚類生理学) 研究室の近況報告

水族生理学研究室・教授  
天野 勝文

水族生理学研究室は2015年4月に魚類生理学研究室から現在の名称に変更しました。古い卒業生の方々には魚類生理学研究室の方がピンとくるかもしれません。現在、私と阿見彌典子講師の2人で研究室を運営しています。ご存知の方も多いかと思いますが、阿見彌先生は2003年度の当研究室の卒業生です。早いもので私が水産学部(当時)に赴任して20年が経ちました。赴任当時は、学生とは少し年の離れた兄貴(?)という感じでしたが、今では学生の両親と同じ世代になってしまいました。研究室には毎年14~16名の学部4年生が配属されます。先代の山森邦夫教授時代からの伝統で、毎朝9時30分に出欠を取っています。年によって異なりますが、今年度は今のところは遅刻をする学生は非常に少なく優秀です。4月の論文紹介ゼミから始まり、各人の研究テーマが決まってから4年間は4回程度の中間発表会を行い、研究の成果報告や研究計画の軌道修正を行なっています。



学生居室にて(後ろの右側が阿見彌先生)

毎年2月に開催される卒業論文発表会は、三陸時代の終わりころから、高橋明義先生と水澤寛太先生の所属する魚類分子内分泌学研究室と合同で開催しています。両研究室とも「ホルモン」をキーワードとしていますので、関連する研究テーマもたくさんあります。発表会では必然的に聴衆も多くなり、学生だけではなく教員にとってもお互いに良い刺激になっています。4年生にはスーツ着用を義務付けていますので、気のせいかな本番では発表内容も少しレベルアップするように思います。

MB新棟の建設に際し研究室のレイアウトについては、ありがたいことに、研究室の希望をかなり尊重していただけました。生理学の実験には当然ながら飼育実験が必須です。そこで何よりも最初に、飼育実験スペースの確保を考えました。その結果、一部屋の3分の1程度の面積の隔離された個室を作り、日長はライトとタイマーで、水温はエアコンで制御して飼育実験を行えるように工夫しました。実験担当者のみしか入室できませんので詳細は不明ですが、主に洞窟魚の一種のブラインドケープカラシン(後述)が飼育されています。その他に、解剖、組織の固定と包埋、組織切片作製、顕微鏡観察、ホルモンの抽出と測定、魚類の行動解析、分子生物学実験用のスペース等を設置して研究を行っています。

今年度は16名の4年生が在籍しています。阿見彌先生の人気だと思えますが、女子学生が半数以上を占めます。実験スペースでは飲食厳禁で

すので、間口3.3m、奥行き10mほどの細長い一室を学生の居室としました。基本的に学生はこの部屋で、データ整理や論文執筆をしたり、昼食やおやつを食べたりします。若干狭いかもしませんが、仲良くわいわいやっていくようです。向かいの水産病理学研究室は学生居室が壁の奥にあるので外からは見えない構造なのですが、当研究室の場合は廊下から丸見えです。したがって、スマホでゲームをしていたり、居眠りなどしているとすぐにばれてしまいます。反対に真面目に実験をしていると外からは見えにくいのですが、研究に関しては、今までと同様に、水生動物の性成熟や摂食を制御するホルモンの機能解明を中心に行っています。阿見彌先生は、「洞窟魚ブラインドケープカラシンの神経内分泌機構の特殊性」と「イカナゴ属魚類の夏眠期における生理学的変化」の解明を主なテーマとして精力的に頑張っています。私の方は、昔の同級生や後輩たちも自分で研究室を構築するケースが多くなってきましたので、これらの方々と楽しく共同研究をやらせていただいています。

相模原に移転してから6年が経ちました。ときどき卒業生が遊びに来てくれます。やはり最近の卒業生が多いのですが、先日は、私が三陸に赴任した年の卒業生が、仕事のついでにはるる北海道から訪ねて来てくれました。その卒業生もとくにアラフォー世代となっておりますが、開口一番「お変わりありませんね」と言ってくれました。お世辞だっ

たとは思いますが、少しうれしかったです。その後、三陸時代の懐かしい話に花が咲きました。卒業生にとっても3年間を過ごした三陸の地が特別の思い出となっているようです。三陸から相模原に移転して、学生の氣質が変化したと感じているのは私だけではないと思います。三陸時代は、「三度の食事より釣りが好き」という学生がかなりいましたが、最近ではそのような学生はいませんが、減ってしまったようです。三陸には三陸の、相模原には相模原の良さがあるということでしょうか? 相模原での卒業生も相模原を懐かしく思い出してくればよいのですが。

最近ふと気づくと、私はあと10年ちよつとで定年を迎えます。これまでに、学生と行った研究を基に多くの研究論文を発表することができたことにあらためて感謝しています。卒業生の皆様も、お時間がありましたら、是非お気軽に研究室にお立ち寄りください。お待ちしております。最後に執筆の機会を与えてくださった三水会に感謝いたします。



2月22日、卒業論文発表会にて

## 川内浩司先生 喜寿のお祝い会

北里大学 水産学部  
(現海洋生命科学部) 七期  
藤田 伸治

街の街路樹も、黄色や赤色に段々と秋めいてきた東北の都、仙台。昨年の十月二十八日土曜日に分子内分生物学研究室（正式には水産利用学講座および海洋分子生物学研究室等）の卒業生が集まり川内浩司・北里大学名誉教授の七十七歳のお祝い会が開催されました。十月末は季節外れの台風により、雨模様が続く日々で当日の天候が心配されましたが、お祝い会当日は先生の健康を祝うかのように雨も上がり交通の乱れもなく、出席を予定していました二十七名全員が、江陽グランドホテル仙台に集まりました。



写真1 川内浩司先生と三石昇先生（5期生）の対談の様子

開催の一時前には、主役の川内先生をはじめ高橋明義教授や卒業生らが次々にロビーに現れ先生へのあいさつと懐かしい昔話が始まりました。会場は円卓の形式で行われ、15期の岩佐直樹君の司会により、先生へのご祝辞から始まりました。その後には川内先生のご希望によりパワーポイントを使ったお礼と報告がありました（写真1）。プレ



写真2 川内先生と奥様（中央右）の同撮影

先生からのお話のあと、ひと通りの歓談し、出席者一人ひとりよりお祝いと近況報告がありました。皆、学業に限らず研究室で学んだ何かを糧に、日々活躍されていることがよくわかりました。北は青森から、西は広島まで、日々仕事で忙しい中をお集まりいただきました。川内先生のお人柄によるものと感じてお

ゼンテーションを行う先生のお姿には、まさに往年の若々しさがみなぎっていました。ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、先生は、大学を定年退職された後は山登りを始められ、それも中途半端なトレッキングでなく低酸素室を使用しての本格高地トレーニングを行っての登山です。その延長でシルクロードから中国まで旅を続けられています。そのような中で見つけた青いけしの花の紹介がありました。地域に群生する花の分類を行い、なんと新種の発見をしたのだそうです。今年2017年も西安方面にいかれているようで、その行動力は年齢を感じさせません。そのような報告に只々感心するばかりです。

先生からのお話のあと、ひと通りの歓談し、出席者一人ひとりよりお祝いと近況報告がありました。皆、学業に限らず研究室で学んだ何かを糧に、日々活躍されていることがよくわかりました。北は青森から、西は広島まで、日々仕事で忙しい中をお集まりいただきました。川内先生のお人柄によるものと感じてお

ります。また来ることが叶わなかった多数の人からもご連絡をいただいております。懐かしい大学の仲間と数十年ぶりの再会といった方もおられました。本当にあたたかな良い会だったと思います（写真2）。

先生のシルクロードの旅は本にまとめられております（ユーラシア大陸横断旅行記）。ご一読をお勧めします。ただの旅行記でなく、地域の歴史とサイエンティストの目線による、一風変わった旅の情景が感じられる一冊です。

## 「北里大学名誉教授加戸隆介先生を祝う会」のご報告

水産学部水産増殖学科  
17期（1992年）卒業  
田中 和義

平成29年10月28日（土）東京都中央区銀座の「三陸大船渡まるしち銀座座店」にて、3月に北里大学を退職された加戸先生の名誉教授就任をお祝いして、「北里大学名誉教授加戸隆介先生を祝う会」が開催されました。祝う会当日は、小雨交じりのあいにくの天気でしたが、加戸先生が在籍した基礎生産、海洋基礎生産、水圏生物、沿岸生物研究室内の卒業生と緒方先生（北里研究所）、難波先生も加わり、総勢42名が集う大変にぎやかな会となりました。

「三陸大船渡まるしち銀座座店」は

その名の通り、岩手県大船渡市のウエディングパレスまるしち（旧まるしち会館）の支店です。当日は、アイナメやソイ・カキなど三陸の海産物に加えて三陸産の鳥や豚、野菜などを使った料理がこれでもか！というくらいにテーブルに並びました。三陸にいたころは当たり前のように釣って食べていた、（実は高級魚の）アイナメを銀座で刺身で頂くとは、なんとも贅沢です。東京ではなかなか味わえない、懐かしい三陸の秋の味覚の美味しさに、参加者全員大感激でした。

加戸先生の門下生が、研究室を超えて集まり同窓会を開くのは、実は今回が初めての試みで、うまく開催できるのか？不安もありましたが、いざ会が始まると、テーブルを囲んで1991年から2017年まで幅広い卒業生が世代を超えて集まり、加戸先生や緒方先生、難波先生との昔話に花が咲き、心ゆくまで楽しむことができました。何年たっても変わらない、海洋生命科学部卒業生の結束力の強さに改めて感心しました。会も終わりに近づいたころ、卒業生から加戸先生へ「リュックサック」をお祝いの品として贈らせていただきました。なにせ加戸先生がフィールドに携えていくリュックサックは、かなり年季が入っていて今にも千切れそう…。プレゼントの「リュックサック」を手にした加戸先生は満面の笑顔で一言、「これを

背負ってまいりますフィールドワークに出かけろ！という事ですね！」と、とても喜んでおられました。

加戸先生のお話を聞いて、お言葉を中心に刻み、出席者全員で記念撮影をした後、とても名残惜しいのですが、本会はお開きとなりました。あつという間の2時間半でした。

この日のために北は北海道厚岸、南は九州熊本から上京してくれた、沢山の卒業生の皆様に感謝いたします。そしてお仕事の間にも本会の開催に向けてご尽力頂いた卒業生の菊地さん、官原さん、緒方さん、澤井さん、鴨志田さん、当日受付をお手伝いしてくれた篠塚さん、中締めを引き受けてくれた上村さんにも本当にお世話になりました。ありがとうございました。

またご多忙のところご参加いただいた緒方先生と難波先生にもお礼申し上げます。

最後に、本会を開くきっかけを作って頂いた加戸先生に心からお礼申し上げます。いつまでもお元気で（特にフィールドで）活躍してください！



## 2017年度三水会関西地区親睦会

水産増殖学科2期  
田代 茂年(2A)

去る2017年11月11日(土)午後6時30分から、JR大阪駅ルクアイーレ10階「GOOD PROVISION」にて関西地区親睦会を開催いたしました。

今回は、緒方武比古先生、加戸隆介先生、千葉洋明先生の三先生にご出席いただき、新しい大阪の顔であるグランフロントでの開催と事務局の力いっぱい企画でした。

先生方々には、お忙しい中、大阪にまでお越しいただき、誠にありがとうございました。

緒方先生からは理事となられたこともあり、大学全体のお話があり、少子化で学生数が減る中での学校運営の厳しさをひしひしと感じる話でありました。

加戸先生は、退職後の近況と次の就職に向けての意気込みについて、お話しされました。

千葉先生は、絶滅危惧種となり食べられなくなるのではないかと危惧される



ウナギについて、完全養殖における雌の成魚の確保と性成熟が大きな課題であり、土用の丑を無くさないためにも頑張つて研究されるとのことでした。因みに、千葉先生は、日本テレビの長寿番組「所さんの目がテン」の「かがくの里・田舎暮らしの科学」に2015年12月6日放送より魚養殖の専門家として出演され、ドジョウ、ホンモロコの養殖やインドネシアのエビ養殖の紹介などされています。

今回、参加者は少なく、やや寂しい感がありましたが、欠席された方々からいただいた返信ハガキには、健康を害されたり、親等の介護のため参加できずに残念、次回は参加したいなど同窓生の高齢化を感じるとともに励ましの言葉が多く書かれてありました。

だからこそ、同窓会は良いもので、年に一度、学生の頃に帰り、大いに語り、食い、飲み、また明日から頑張る原動力として、今後も継続していきます。

来年も必ず開催しますので、近畿圏はもちろん西は沖縄県から東は中京圏あたりまでの三水会会員の方々のご参加をお待ちしています。

また、先生方に於かれましては、奥様ご同伴の旅行先としても、食事処・見処いっぱい関西は最適ではないかと思えますので、我が関西地区懇親会へのご参加の方、よろしくお願いたします。

## 第54回北里祭報告

海洋生命科学部 執行委員会  
総務 3年 川治 文克

私たち海洋生命科学部執行委員会は、「学部が存在をアピールし、広める」ことを目標に活動しています。その中には、海洋生命科学部北里会体育会・文化会の部活・同好会の書類整理や新入生オリエンテーションの企画運営などがあります。今回は10月7日、8日に行われた紅葉祭、11月4日、5日に行われた北里祭での活動を報告いたします。

紅葉祭は北里大学十和田キャンパスで毎年開催されている大学祭です。私たちが参加するにあたって、一番話し合ったことは出し物についてでした。何度もの話し合いを重ねた結果、海洋生命科学部らしく「ホタテ焼き」を出店することに決めました。また、私たちは十和田キャンパスに行ったことがなかったので、準備のほとんどが手探りの状態でした。しかし、当日は生憎の雨模様にも関わらず、大勢の方々が私たちの店に足を運んでいただきました。

一方、北里祭は相模原キャンパスで毎年開催されている大学祭です。出店内容は紅葉祭と同様に「ホタテ焼き」にしました。用意したホタテの数に不安がありましたが、紅葉祭での出店の経験を生かしたことや宣伝の甲斐もあり、たくさんの方々からホタテを味わっていただくことがで



きました。そして、紅葉祭、北里祭どちらもホタテ焼きを完売することができ、大学祭を通して様々な方々と関わり、海洋生命科学部の存在をアピールし、広めることができました。また、私たち自身がたくさんのお話を学ぶことができ、イベントを無事に終えることができました。

これら大学祭での活動を終え、執行委員のメンバーの絆が深まることも、もつと新しいことにチャレンジしたいという気持ちが強くなりました。執行委員会は来年度から次の代に引き継がれますが、私たち現役執行委員が引退した後も、積極的に学部活動に参加していきたいと思っています。

最後になりますが、今回も三水会のご支援により他キャンパスとも交流することができ、地域の皆様へ「学部の存在をアピールし、広める」ことができました。心より感謝申し上げます。

## “ 掲 示 板 ”

### ■ 平成30年度三水会定期総会のご案内

下記により平成30年度三水会定期総会を開催します。

理事、監事、代議員はもとより一般会員も傍聴できますのでご参加ください。

開催日時：平成30年5月19日（土）午後5時～（受付4時30分）

開催場所：北里大学白金キャンパス 薬学部1号館1402教室

（注）：開催場所は大学の都合により変更される場合がありますので、ご参加の方は事務局までご確認ください。

- 議 事：1. 平成29年度事業報告及び収支決算報告承認の件  
2. 平成30年度事業計画案及び収支予算案承認の件  
3. 第14期三水会役員改選及び第18期北里大学同窓会役員推薦承認の件  
4. その他

### ■ 平成30年度三水会関東地区親睦会案内

会員とご家族を対象とした親睦会を開催します。

内容は千葉県木更津市にて「潮干狩り」を予定しています。詳細につきましては、決まり次第三水会ホームページに掲載します。

### ～訃 報～

水産学部元助手 齊藤 博司先生 平成29年8月31日逝去 享年67歳

水産食品学科5期生 水野 幸二氏 平成29年12月14日逝去

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

### 編集後記

2018年1月23日、草津の本白根山の噴火のニュースが流れました。御嶽山の噴火の記憶もまだ新しく、熊本の地震、台風被害など自然災害が続いています。自然災害を防ぐ手段は無いかもしれませんが、被害を最小限に抑えることは可能でしょう。そのためにも風化しがちな東日本大震災を振り返るとともに現在の東北を知ることも大切です。

学部も相模原に移り7年を経過します。一方、三陸での学部創成期を過ごした諸先輩方は第一線を退く年齢になってきました。世代の違いは致し方ないものの時間に余裕のできた世代の方々にはぜひ現役学生や三水会の新規会員との交流の場を生かして三陸のDNAを引き継いでいただきたいと思います。2018年度も前年に引き続いて関東地区親睦会を開催する予定です。詳細は今後ホームページでお知らせいたしますので、若い方々もぜひとも参加していただき、新旧会員の交流の場になればと思います。